航空ファン
THE KOKU-FAN
ワイドカラー
WIDE COLOUR
デハビランド
モスキート
特集
ショウ空軍基地のRF-4C部隊を見る
ロールアウトした新制空戦闘機F-15
小さなRC機 02用 “リトルフライ”
'72
OCTOBER
10
$ 2.30

ノースロップのインターナショナル・ファイターF-5E "タイガーII" の1号機。去る6月23日にノースロップのホーソン工場でロールアウトしたときのもの。ノーズに "タイガー" の顔を描いている。(Northrop Corporation Photo)

F-5E "タイガーII"

フェアチャイルド A-10A

ノースロップ A-9A

米空軍のAX候補として「A-10A」と張り合っているノースロップA-9A 1号機。本機も5月30日エドワーズ空軍基地で初飛行して以来、同基地で飛行テストがつづけられている。写真は初飛行を終えて着陸するところ。(上の写真)は随伴機のA-37も一緒に映っている。

南カロライナのショウ空軍基地

JN
JN

"フライング・タイガー" のF-105G

(Official USAF Photo)

空母コンステレーションの搭載機

英国の航空博物館 1

ロン　　　　　ら30キロ　オ　ルト　ウィレ　　　　　ドン　レヴァース・エアーカレッジの一　　　　最近のシ　　ト機ま　数々の飛行機を集め　シートレワース　コレクションがある　移ろして展覧　飛行可能な状態　復元して　飛行ショーも見せると　の博物館の特徴　毎日曜日　　　　広　不源の空　　　航空ファン　　一度は訪問して　　　博物館である

KAWASAKI *Ki-61-I KAI HIEN*

川崎キ61-I 改飛燕

KAWASAKI Ki61-I KAI HIEN

☆キットについて

レベルの新製品として、現在好評発売中である1/32シリーズの飛燕であるが、数々発表される素晴しい写真資料によると、実に魅力的なマーキングの機体が数多くあって、このキットをもとに1型甲や乙へ改造し、丙、丁型の各型を作り、使用各戦隊別、代表的な機体に仕上げてみるのも模型的な楽しみかたである。

機別上のポイントは、甲型の場合と乙型ともに、機首下のエンジン点検カバーの後端の分割線を主翼付根まで後退させ、風防前方の機銃ガス抜き穴を一個にし、円形の点検ハッチをつけ、主翼付根上の段差フタを埋めればよく、甲型はさらに尾輪を引込式にし、左右に開く尾輪カバーを工作すれば可能。20mm機銃装備機にするときは図1のようにランナーの引伸し棒で銃身を作り、翼上面の機銃ハッチのフクラミを図のようにパテで改修するとOKである。写真資料の機別は、先に述べたガス抜き穴の数と円形ハッチの有無およびエンジンカバー分割線と、主翼前縁の間隔を見るのがポイント。尾輪カバーがあれば甲型と考えれば良い。以上が大ざっぱな各型識別点である。

塗装について☆

図1と3 飛行第244戦隊所属の1型乙でマウザー砲を装備の機体。全面は銀地の上に濃緑色のまだら迷彩があり、下面は銀地。尾翼の戦隊マークは白フチ付で記入されたタイプのもので、白ふちがついて入れられている。脚カバーは隊長機を示すものらしい黄帯があり、番号は推定。翼上面の日の丸は白フチ付、白帯を残してあり、エルロンは白帯なし。左翼は図のように白帯の上へ濃緑の迷彩がなされている。

図2 有名な第244戦隊の小林隊長機で、機体番号24の機体が2機あり、この図のものとブルーの帯つきのものが1型改丙。機体番号265号機は1型改と説明されている例が多いが、1型乙が正しい。その他6月号掲載の銀地に赤い電光マーク付1型乙(6月号掲載図)、1型乙と上面濃緑色、下面銀の1型改丙に白い電光マークつきの機体も小林隊長機といわれている。

なお戦隊マークは赤だけのものや白だけで記入されているものがある。

図4 飛行第59戦隊第3中隊の1型乙で、機体は銀地に赤い電光マークつき。方向舵は他の機体のものを転用したものらしい。

なお6月号掲載の図3、第244戦隊機は1型乙と推定されるもので、戦隊マークは赤一色。機体は1型乙が正しいようである。　(K Hashimoto)

キ61-I丙データ (Ki 61 I c technical data)
全幅(Span)12.00m　全長(length)8.94m　全高(height)3.70m　全備重量(gross weight)3,470kg
発動機(engine)ハ40 (HA 40)(1,175HP)×1　最大速度(max speed)590km/h　実用上昇限度(service ceiling)10,000m　最大航続距離(max range)1,800km　武装(armament)12.7mm×2　20mm×2　爆弾(bomb)1発 250kg×2

KIT

Revell recently included the HIEN in its 1/32 series. The HIEN is rich in markings with many of them illustrated in various photos and photo books now on sale. In addition you can easily remodel the Revell kit into the Ki 61 1 Ko(甲) Ki 61 1 Otsu(乙) and other HIEN types. Therefore you can enjoy matching the models and their various squadron markings.

Remodelling tips are as follows. In both the cases of the Ko(甲) and Otsu(乙) types, move the partition at the rear edge of the engine access cover back to the wing root, cover the gas ports of the machinegun in front of the canopy leaving only one, and install a round hatch for inspection, and reduce the bulge on the wing roots. For Ko type make a device so that the rear wheel can be retracted into doors which open to the right and left. In order to install a 20 mm gun, make a gun barrel with a plastic runner as shown in Fig 1 and enlarge the gun mount over the wheel well with putty.

The number of exhaust vents, whether or not there is a round hatch, the location of the partition and width of the wing leading edges are major points of descrimination in identifying HIEN photos. If there is a rear wheel well, you can be sure it is a Ko-type.

PAINTING

Figs. 1 & 3. This is the Ki 61 1 Otsu(乙) HIEN equipped with a mauser gun belonging to the 244th Sentai (fighter wing). It has a dark green camouflage over a silver base. The lower half of the fuselage is silver. On the tail is the Sentai insignia encircled in white. On the gear cover is a yellow band which seems to show that this is the captain's craft. The number is shown for detail.

The Hinomaru flag mark on the right wing is encircled in white. The aileron has no white band. On the left wing there is a dark green camouflage on the white band as shown in Fig 1.

Fig 2. This is the HIEN used by Commander Kobayashi of the 244th Sentai. There are two HIENs which have the aircraft number of "24". The one shown in this figure and the one with blue bands are Ki 61 1 Kai Hei(丙). The one which has the aircraft number of "265" is sometimes called the 1 Kai but is actually the 1 Otsu. It is also said that the 1 Otsu (carried on June issue) which has red lightning mark over a silver base, and the 1 Kai Hei with a white lightning mark painted in dark green on the upper and in silver on the lower surfaces were those used by Commander Kobayashi. There are also HIENs on which Sentai insignias are described only in red or white.

Fig 4. This is the Ki 61 1 Otsu(乙) belonged to the 3rd Squadron of the 59th Sentai. On the silver fuselage is a red lightning mark. It seems the rudder is not the original one for this aircraft. By the way, the one carried in Fig 3 of the June issue is the 1 Otsu(乙) type HIEN used by Commander Kobayashi of the 244th Sentai. (K Hashimoto)

飛燕の塗装に必要なレベル・カラー	
1 ホワイト	3 レッド
5 ブルー	8 シルバー
10 濃緑色	33 フラットブラック
レッドブラウン	58 黄橙色
青竹色	01 フラットベース

川崎3式戦闘機"飛燕"

写真は1964年11月、入間基地で撮影

マーチン B-26B～C マローダー

MARTIN B-26B～C MARAUDER

第2次大戦中のアメリカ中型爆撃機の傑作といわれているB-25など有名であるが、野心的な設計による高速爆撃機として注目されたのが、このB-26マローダーで、試作機をつくらず1939年8月いきなり量産発注され、41年から量産機の部隊配備が開始された。

太平洋戦域では1942年4月ニューギニア攻撃で初登場しているが、主としてヨーロッパ戦線での活躍がよく知られている。ノルマンディ上陸作戦に参加するなど、B-25とともにアメリカ中型爆撃機の主力機として活躍した。

キット紹介

有名な機体のわりにはキットの発売例が少なく、レベル1/72シリーズのB-26Bは貴重な存在である。キットの全幅は約30cm、全長約24cmと比較的大型サイズの仕上りとなり、流麗なマローダーの特徴をうまく表現した傑作キットである。

可動部は上部銃座と尾部機銃の銃身、車輪とプロペラというシンプルな構成であるが、例によって詳細なエンジンを内蔵しているのも魅力のひとつである。

塗装について

図1と2 第9空軍第322爆撃航空群第451爆撃中隊所属のB-26C-45で、機体は無塗装の銀、垂直尾翼と胴体と主翼の帯がオリーブドラブ(12)、方向舵はイエロー(58)、主翼と胴体には白と黒のインベイジョン・ストライプスがある。

図3 第34爆撃中隊所属のB-26Bで、機体上・側面がオリーブドラブ(12)、下面はニュートラルグレー(13)、尾翼の数字と機首のMille IIIの文字は白、国籍マークは左翼上と右翼下面にある標準タイプで、スピナは黒(33)。

図4 第9空軍第449爆撃大隊第322爆撃中隊所属のB-26C、機体はシルバーで、翼上面と胴体の背、垂直尾翼がオリーブドラブ(12)の塗装、PN X の文字は黒、国籍マークは標準位置にある。 (K.Hashimoto)

B-26Cデータ (technical data)
全幅 (Span) 21.5m、全長 (length) 17.75m、全高 (height) 6.6m、発動機 (engine) P&W R-2800-43 (2,000HP)×2、全備重量(gross weight) 15,800～17,381kg、最大速度 (max. Speed) 455km/h、巡航速度 (cruising speed) 344km/h、航続距離 (range) 4,590km、武装 (armament) 12.7mm×12、爆弾 (bomb) 1,360kg、乗員 (crew) 5。

Together with the famous B-25, the Martin B-26 Marauder was the mainstay medium-sized bomber of the U.S. Forces during WWII. Noticeable was its use as a high speed bomber. Without any test manufacturing, it was placed into mass production in August 1939 and assigned to operational use starting in 1941. Its first appearance in the Pacific theater was in April 1942 at New Guinea. Its major activities however were in the European theater. Its distinguished service in the Normandy landing operation was well known.

KIT

Model aircraft kit fans feel rather dissatisfied with the small number of Marauder kits on sale. The B-26B kit, now on sale in the Revell 1/72 series is a most welcome addition. The total width of the kit is about 30 cm and the total length is 24 cm. It is a masterpiece in which the characteristic of the Marauder is fully expressed. The upper turlett, the machinegun in the tail, wheels and propeller are moveble. An elaborate engine is added to the charm of this model aircraft.

PAINTING:

Figs 1 & 2. This is the B-26C-45 belonging to the 451st Bomber Squadron, 322nd Bomber Wing 9th Air Force. It is all metalic silver. The tail fuselage and bands on the wings are Revell Color 12, olive drab while the rudder is RC 58 yellow. On the wings and fuselage are invasion stripes in white and black.

Fig 3. This is the B-26B of the 34th Bomber Squadron. The top and sides of the fuselage are RC 12 olive drab. The lower surfaces are RC 13 neutral gray and the figures on the tail and the letters Mille III on the nose are white. Nationality marks are on the left wing and the lower surface of the right wing. The spinner is RC 33, black.

Fig 4. This is the B-26 belonging to the 322nd Bomber Squadron 449th Bomber Wing 9th Air Force. It is wholely RC 8 silver. The upper surfaces of the wings, the top of the fuselage and the vertical tail are RC-12 olive drab. The letters PN X are black. The nationality mark location is standard; one on the upper left wing and the other on the lower surface of the right wing.

(K. Hashimoto)

B-26の塗装に必要なレベルカラー

①ホワイト	58イエロー
⑧シルバー	(12)オリーブドラブ
⑬ニュートラルグレー	33黒つや消し
⑮フラットベース	58黄橙色

マーチンB 26C-5-MOマローダー爆撃機 待機中のマローダーの一機 機体の塗装は上面オリーブドラブ、下面ニュートラルグレイの標準塗装で、2色の境界は波型に塗りわけられている。なおシリアルはオレンジイエロー（アイ[illegible]フィケーション[illegible]イエローとも呼ぶ）である (AAF Materiel Command Photo)

マーチン　B-26G　マローダー

アメリカの空軍博物館で保管しているB-26Gマローダー　シリアルは43-34581で　機体の塗装は第9空軍第98爆撃航空群387爆撃大隊の所属機のものに塗られて展示されている

SEPECATジャギー↑

数海の上を行くジャガー　ランカシャー州のBAC工場を飛び上って　現在テスト中のもので　英空軍用攻撃型ジャガーS06号機（手前）と07号機　06号機は5型の1号機　07号機は英国製の最後　攻撃装置の飛行テスト用　使われる

爆弾を積んだバッカニア

[illegible]

U.S. AIR FORCE

帝都防衛戦隊の2式単戦“鍾馗”

振武特攻隊の1式戦"隼"

調布基地で訓練を終えて知覧へ進出　昭和20年5月　沖縄沖の敵機動部隊に突っ込んだ振武特攻隊　……発進前の…である。……

（このページ全部）第38戦術偵察訓練飛行隊（38th TRTS）のRF-4C。同飛行隊は米空軍で唯一のRF-4Cの訓練飛行隊。RF-4C乗員の訓練のほか、パイロットや武器体系の教官の養成も行なっている。テイル・レターは"JL"で、部隊のエンブレムは"わし"の姿である。

●来日したワイドボディー

DC-10とL-1011

大量高速輸送時代は，わが国内線でもまもなく開幕する。その売り込みをかねたデモンストレーション飛行で5月末，マクダネル・ダグラスDC-10とロッキードL-1011が相ついで来日した。3発形式でともによく似た外形，性能諸元もほとんど変らず，路線への就航はDC-10がわずかに早まったが，まったくの好敵手。おたがいに騒音の低さを売りもの。東京と大阪で関係者を招いて数回のデモ飛行を行なった。

このページは5月20日，東京国際空港でデモ飛行に離陸するDC-10。機首には発注航空会社のマークを付けている

〔上〕5月23日 大阪国際空港に飛来したロッキードL1011トライスター。緑とブルーの帯をつけたイースタン航空の塗装。胴体にはやはり発注エアラインのマークを描いている（撮影：CAPC 米田志津夫）。〔右下〕東京国際空港のDC-10。尾部の中央エンジンは L1011が胴体後端に収めて吸気口を垂直尾翼前方に出しているのに対して、DC-10は垂直尾翼の付根に装備。これが両機のもっとも目立つ外形上の特徴でもある。

（上・左・下）東京国際空港のL.1011。上はその特徴ある尾部。左は操縦席。同機はデモ飛行で自動着陸も実演した。コンコルドがすさまじい"音"という印象を残して去ったあとだけに、従来のジェット機にくらべても騒音が低いことはたしか。しかしどちらが低いかはというのがもっぱらの評。"ささやくジェット"L.1011と"よき隣人"DC-10 そのデモの成果、いまのところまったく5分と5分である

〔左上〕帰投した標的機から投下されたナイロン製のターゲット　地上約700フィートで投下。機銃弾は3色に着色されて　命中弾はその色をこのターゲットに残す。〔左下〕かぶとと矢をあしらった第3飛行隊のエンブレム。〔上〕機銃弾の装てん。射撃機は1機が100発を携行する。〔下〕訓練で帰投した第4航空団第7飛行隊機。

フォート ニュース

（左・上）7月26日　マクダネル・ダグラスのセントルイス工場でロールアウトしたF-15A制空戦闘機の原型1号機。1947年中頃に登場したF-86以来、米空軍にとっては27年ぶりの制空戦闘機。全体をブルーの"制空色"に塗っての登場であった。プラット・アンド・ホイットニィF-100PW-100ターボファン・エンジン（推力約11,000kg）2基装備。最大速度マッハ2.3、ダッシュではマッハ2.5の性能とみられている。写真はいずれもロールアウト直後のスナップ（アート・ページおよび本文記事参照）。

（下）こちらはエドワーズ空軍基地でテスト飛行がつづけられているフェアチャイルドA-10A原型1号機。すでに50回近い飛行テストを終えており、主翼下のパイロンと胴体下に計18,500ポンド（8,400kg）の訓練用爆弾を積むテストなども行なっている。

de Haviland MOSQUITO
モスキート

全木製双発機のデハビランド モスキートは 爆撃 戦闘 写真偵察から雷撃 機雷敷設やパスファインダー と いろんな任務を見事 こなして万能高性能機であった イギリス空軍の大戦機では スピットとともに2大傑作機 あるいはランカスターを含めた3大傑作機の一つにあげられている。

(上)戦闘爆撃機のFB 6 ,第487中隊の所属機である。

(下)1940年11月25日 ハットフィールドで初飛行したモスキートの原型1号機（W4050）。本機は初飛行でいきなり時速400マイル（644km/h）近い速度を出し 片発停止で上昇機能なども披露して参観者を驚かした。このあとで 写真偵察機と戦闘機の原型W4051とW4052がつづいて製作されている。

(下)夜間戦闘型のＮＦ 12(Mk 12)の夜間戦闘機は400機が造られ 1942年1月に部隊に配属されて以来 著しい活躍ぶりで まもなくボーファイターやハボックに代って 夜間防空戦闘機の主力となった。機載レーダーを改良しての性能向上の試みはさらにつづけられたが A.I.MkⅧ(8)レーダーを積んだＮＦ 12もその一つ。機首下面の20mm機関砲はそのままだが 主翼の7.7mm機銃は廃止し レーダーを収めた機首はプラスチックで整形されてずんぐりした形となった。夜戦としての性能は大はばに向上した 本機の1号機の初飛行は1942年8月 Mk 2の機体を改造して97機が造られている。下の写真は第29中隊の所属機である。

〔右 下2枚〕モスキートFB 18。コースタル コマンドに配備されたFB 6の働きはめざましかった。60ポンド ロケット弾で数多くのドイツ艦船を葬っている。のちにロケット弾のかわりに機首下面に57mmモリンス砲を装備した型が造られたが これがFB 18である。原型のHJ732は1943年8月に初飛行 27機がMk 6から改造されている。1944年3月25日 第248中隊のFB 18は フランス沿岸沖で初めてUボートを撃沈する戦果をあげている。6ポンド砲の野砲に相当する57mm砲。命中弾の威力はおして知るべしである。

〔上〕PR 8。高々度爆撃型のB Mk 9を偵察機に改造したのがPR 9。1943年5月8日に1号機が初飛行。マーリン72エンジン装備。90機が引渡されて 1944年初めごろまで 写真偵察機の主力として活躍。〔下〕PR 16 これもMk 16爆撃型を偵察機に改造したもので 初めて操縦席を気密にした高々度偵察機 432機が造られ 終戦まで広く使われている

〔下〕大戦中 BOAC（英国海外航空）が中立国スイスとの連絡・国際用に使ったモスキートMk 6。爆撃型を改造したものだが まったくの無武装。快速を生かしてドイツ戦闘機部隊の基地をかすめて飛ぶという わが100式司偵のようなはなれわざで 1943年終りごろから2年間にわたって重責をはたしている Mk 4と6の10機がこの任についた

未発表 陸軍機写真集

松戸の帝都防衛部隊　Tokyo Defense Air Corps stationed Matsudo Air Base

Ki44-II Otsu SHOKI of the 70 SENTAI at Matsudo Air Field. No 70 SENTAI formed at Matsudo in June 1941 operated there until late 1944 by which time it had transferred to Matsudo Air Base and participated in Defence of Tokyo until end of the war

© 菊池俊吉

松戸を基地に東京の防空に任じた飛行第70戦隊の2式単座戦闘機「鍾馗」いずれも2型乙である。昭和18年7月、満州の東京城で編成された70戦隊は、本土防空強化のため昭和17年11月に松戸へ移駐、終戦まで帝都防空の任にあたった。これは移駐まもない頃の撮影である。プロペラを豪快にまわして待機中のどっ猛なつらがまえの「鍾馗」。飛行中の機体は、めずらしく胴体に機番号を大きく描いている。

Ki-44-II SHOKI of No.[illegible] SENTAI prepare to take off at Matsudo Air-field.

KI 43 HAYABUSAs and crews of SHINBU Special Attack Air Corps at Chofu Air Field. On 4th May 1945, HAYABUSAs from No 19 and No 19 SHINBU Units were flown from Chiran, Kyushu to attack U. S. Navy Task Force near Okinawa

振武特攻隊

SHINBU Special Attack Air Corps

スピットファイアの戦闘記録 （その14）

（上）スピットファイアF Mk XVIII(18)。前号で紹介したF Mk XIV(14)につづいて量産に入ったのが、このF Mk 18。主翼や降着装置を強化して、翼内と後部胴体の燃料タンクを増設、ドイツや極東での長距離侵攻作戦にあてることになっていたが、部隊に配備されるころは戦争が終って、実戦には1機も参加することがなかった。F Mk 18は戦闘型のF Mk 18と戦闘偵察型のFR Mk 18の2ヴァリアントも造られたが、終戦のため量産途中で発注がキャンセルされ、F Mk 18は100機、FR 18は200機が生産されたにすぎなかった。下の写真はFR 18の1機。FR型は極東や中東方面の部隊に配備されて戦後数年間就役している。

海兵隊のコルセア（その3）

U S MARINE CORPS OFFICIAL PHOTOS

【上】終戦後日本に駐留していた第2海兵航空団（MAW 2）第31海兵航空大隊（MAG 31）のF4U 1D。高度約8000mで富士山頂付近をパトロール中 先頭は中隊長のM.R. ヨンタ少佐機 終戦翌年の1946年1月31日の撮影【下】朝鮮動乱に参加したF4U 4B 第1海兵航空団（MAW 1）第33海兵航空群司令部付整備中隊（H&MS 33）の所属機で ナパーム弾攻撃に移る瞬間のスナップ 1952年5月18日の撮影。